９月７日（月）ヘブル人への手紙３章７節

「今日、もし御声を聞くなら」

ヘブル書の著者は、詩篇９５篇７節を引用しながら、「今日」をその時代の人々に適用しています。それと同時に、みことばは今の時代を生きる私たちにも語りかけつつ、「今日」を私たち一人ひとりにも関連づけようとしています。ですから、聖霊を通して神様が語られる時が「今日」なのであって、「今日」は、私たちが神様の御声に応答すべき時なのです。ですから、「今日、もし御声を聞くなら」と言われていることについて、私たちは信仰の決断を決して先延ばしすることのないようにしましょう。

「今日、もし御声を聞くなら」と言われていますが、私たちは、神の声を聞くことを簡単に考えてはいないでしょうか。例えば、礼拝においてみことばを聞いた時に私たちはどのような態度を取っているでしょうか。どちらかというと、良いお話しでしたという感じで終わってしまってはいないでしょうか。また聖書の中からさまざまな知識を得ることができてよかったとそれだけで満足してしまってはいないでしょうか。もしかすると聞き流してしまっているかもしれません。私たちが心にとめておかなければならないことは、神の声を聞くということは、聞く私たちの側で語られたみことばに私たちが応答する責任が問われているということです。ですから、神のことば、すなわち神の御声に従わなければ、その結果として私たちは不服従の責任を免れることはできません。それは、イスラエルの歴史を見れば明らかです。そう考えた時に、私たちはもっとみことばを聞くことに真剣にならなければならないはずであり、恐れをもってみことばを聞かなければなりません。しかし、自分の力でみことばに従おうとしても、自分の無力さを思えば、そのようにできるものではありませんから、謙遜に主の助けを祈り求めなければなりません。私たちは、どのような心と態度で主の御前に出て、主のみことばを聞いているでしょうか。

９月８日（火）ヘブル人への手紙３章８～１１節

「あなたがたの心を頑なにしてはならない。荒野での試みの日に神に逆らったときのように。」（８節）

昨日も記しましたが、７，８節は、詩篇９５篇７、８節の引用で、実際の詩篇９５篇８節には、メリバと荒野でのマサという地名が出てまいりますので、出エジプト記１７章１～７節の史実に基づいています。また９節は民数記１４章３４節「おまえたちが、あの地を偵察した日

数は四十日であった。その一日を一年と数えて、四十年の間おまえたちは自分の咎を負わなければならない。こうして、わたしへの反抗が何であるかを思い知ることになる」に基づいていますが、イスラエルの民は出エジプトを成し遂げた後、旅を続け、カナンを目前にする所まで来ましたが、偵察に行った者たちの不信仰の言葉に惑わされてイスラエルの民は約束の地に入ることができず、神のさばきとして荒野を四十年間さまよい、そこで死に絶えることとなりました。そして１１節は、民数記１４章３０節「エフンネの子カレブと、ヌンの子ヨシュアのほかは、おまえたちを住まわせるとわたしが誓った地に、だれ一人入ることはできない」に基づいています。

私たちは、イスラエルの民と同じ失敗をしないためにも、ここからいくつかのことを心にとめておかなければなりません。まず一つが、イスラエルをエジプトの奴隷生活から導き出されたように神様は私たちをも罪の中からあわれみと大いなる救いのみわざによって贖い出してくださいました。そのことへの感謝を決してないがしろにせず、忘れないことです。そして神への感謝がなくなれば、イスラエルの民のように必ず不平や不満が出てきます。常に神への感謝と賛美が口から出てくる者でありたいと思わされます。二つ目が、神が立てた指導者に主のゆえに従うことです。もし指導者がみことばを通して神のみこころにかなう指導していると確信したならば、それに素直に従い、もし間違った指導をしていると思えば、遠慮なくそのことを指摘すべきです。そして群れの指導者が間違った言動をするとその影響は計り知れませんから、指導者のために常に祈らなければなりません。三つ目が、神様は荒野のような厳しい所へ私たちを導くことを許されることもありますが、そこにも必ず神様の恵みとあわれみがあることを信じて、前進いたしましょう。そして四つ目に、主は私たちの行いに対して正しいさばきをなされることは、イスラエルの民に下された神のさばきから明らかです。ですから罪が示されたなら謙遜に主の前に罪を悔い改めなければなりません。

これらのことを今日心にとめつつ、自分に今欠けたものが何かないか、主の前に思い巡らしてみましょう。

９月９日（水）ヘブル人への手紙３章１２節

「兄弟たち。あなたがたのうちに、不信仰な悪い心になって、生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。」

ここでヘブル書の著者は、「兄弟たち」と呼びかけています。つまりこの手紙を読み、同じ信仰告白し、教会の交わりの中にいる人たちの中にも、悪い不信仰の心になって生ける神から離

れる危険性が十分にあることを彼自身が知っていたのでしょうし、学者の中には、実際に誘惑され、神から離れる者が複数いたのではないかと指摘する人もあります。ですから、だれもイスラエルの人々と同じ道を歩まないようにと警告を与えています。私たちも、不信仰な悪い心になって、生ける神から離れる危険があり、それにより受けるべき祝福を逃してしまう危険がいくらでもあることをおぼえて、自らの信仰の歩みに注意しなければなりません。特に「だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がないように」と不信仰に特別な注意を払っていますが、それは不信仰が。必ず悪い結果をもたらすからです。イスラエルの民の姿から不信仰について私たちが知ることができるのは、神の道から迷い出ることです。特に、イスラエルの民は習慣的に神の道から迷い出ていました。ですから、私たちは神が導こうとしている道から迷い出ないようにすべきです。そして、なぜ迷い出るのかと言いますと、頑なになった心のゆえに神の御声が聞こえなくなってしまっているからです。神の御声に耳を傾けずして、私たちは決して神の道を導きに従ってまっすぐ歩むということはできません。

さらに不信仰とは、生ける神から離れることです。先ほども記しましたが、私たちが信じている神は、生きておられる神です。だからこそ私たちに語りかけて導きを与え、私たちと交わることを切望し、私たちが信じて従うことを喜ばれますが、１１節にありますように、逆らう者、不信仰の者に対しては怒りを燃やされるお方です。

ここであらためて思わされることは、なぜここでヘブル人への手紙の著者は、「生ける神」という表現を使い、私たちが信じている神は生きていることを強調されたのかということです。やはり、私たちの信仰において欠かせないことの一つが、私たちの信じている神は生きているということなのでしょう。今日もう一度生ける神を信じることの意味を深くおぼえたいと思わされます。

９月１０日（木）ヘブル人への手紙３章１３節

「『今日』と言われている間、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされて頑なにならないようにしなさい。」

月曜日のみことばの扉において「ヘブル書の著者は、詩篇９５篇７節を引用しながら、「今日」をその時代の人々に適用しています。」と書かせていただきましたが、１３節において著者は「今日」をまさに彼と同時代の時に関連させようとしています。そして、ここで「「今日」と言われている間」とあります。つまり、「今日」と言われている時には終わりがあるということです。つまり、新約の時代を生きるすべての聖徒にとっては、「今日」とはイエス様の再臨を待ち望ん

でいる時であり、イエス様が約束どおりに再臨された時に、世の終わりが到来し、栄光のからだをもって死からのよみがえりにより、救いの完成が成し遂げられることで終わりの時が来ます。

そして、私たちに対してキリストの再臨を待ち望む希望が与えられていることは、大きな恵みなのですが、「日々互いに励まし合って」と言われているということは、私たちが罪に惑わされて頑なになる危険が常にあるということです。そして人の心が頑なになる原因は罪に惑わされるからだと聖書は教えています。罪は、私たちの心を頑なにするためにありとあらゆるものを用います。それに対して人が、罪の惑わしに対して抵抗することなく、それを常習的に受け入れる時に、人の心は頑なになってまいります。「だれも罪に惑わされてかたくなにならない」ために「日々互いに励まし合う」ことが必要なのです。つまりヘブル人への手紙の著者は、他のキリスト者から孤立した者のほうが、他のキリスト者と交わっている者よりも容易に罪に惑わされて頑なになることを知っていたのでしょう。そして、人々の交わりに積極的に加わらなければ、互いに励ましあうことはできません。後藤敏夫師が、著書の中で、あるクリスチャンのブログの一節を紹介しています。「教会はもはや自らが属する「神の家族」や「キリストのからだ」ではなく、『みんなで一人旅をする同好会』になっているのかもしれません。各自が神を個人的に礼拝し、天国への旅をしているのです。」(「神の国を生きる」　いのちのことば社ｐ５６）私たちの教会は、『みんなで一人旅をする同好会』になってはいないでしょうか。そして、皆さんお一人お一人はいかがでしょうか。私たちは、さまざまな交わりの機会を用いて、日々互いに励まし合って、罪に惑わされて心を頑なにすることから守られたいと思わされます。

９月１１日（金）ヘブル人への手紙３章１４節

「私たちはキリストにあずかる者となっているのです。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、です。」

１４節冒頭に、「私たちはキリストにあずかる者となっているのです。」とありますが、これはキリストにあずかる者とされているとの不動の立場や安定した信仰の基礎を表現しています。そして、キリストにあずかる者とは、キリストとともに御国を受け継ぐ、天の御国に参与するということです。ですから、昨日も申しましたが、私たちにはこのような確固とした信仰が与えられているだから、だれも罪に惑わされて頑なにならないようにとの信仰の励ましにつながっていくのです。

「最初の確信」とは、イエス様に対する信仰告白であり、信仰の確信をイエス様に置くこと

であると解釈できます。私たちの信仰の始まりはイエス様であり、そのイエス様が私たちの信仰の不動の基礎です。そこから私たちのイエス様に対する信仰の確信が増し加えられます。「もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば」とありますが、一人ひとりが継続してキリストとの交わりの中にあり、最初の確信を終わりまでしっかり保ち続けることが条件として想定されています。さらに、確信という言葉は、財産の所有者が権利証書を所有するがゆえに持つ保証と関連しています。その持っている証書が私たちから所有物を失わせないと確信させるのであり、証書をしっかりと保有している限りにおいて、私たちが所有するものは自分のものになると確信することができ、自分の手から所有物を何ものも奪うことができないと信じることができます。しかし、その一方で「もし」という表現は、最初の確信を終わりまでしっかりと保つことができない可能性があり、イエス様に対する信仰告白をもっての最初の確信を持ち続けることは、それほど簡単なことではないことを思わされます。例えば、ユダヤ人クリスチャンの中には、ユダヤ主義に逆戻りしたり、御使い礼拝やモーセに対する過度の崇拝なども出てきました。今の私たちに対しても、思想的なもの、世の誘惑、また家族からの反対など、さまざまなかたちでイエス様に対する信仰、またその信仰から来る確信を揺るがされるようなものが多くあります。ですから、私たちも、忍耐をもって最初のイエスさまに対する信仰の確信を終わりまで持ち続けていかなければなりません。ある意味で、私たちはそれらを戦い取っていかなければならないとも言えるでしょう。私たちは、そのようにして激しい戦いの中でも終わりまでしっかりと保ち、勝利していきたいと願わされます。しかし私たちは決して信仰の確信を保ち続けるための孤独な戦いを続けるわけではありません。信仰の創始者であり、完成者であるキリストご自身が私たちを励まし、支え、助けてくださっていることをおぼえましょう。ペテロのために「しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。」（ルカの福音書２２章３２節）と言われたイエス様は、私たちのためにもとりなし続けていてくださるのです。また、主は教会の中に励まし合う兄弟姉妹を与えてくださっていることにも感謝しましょう。

そのようにして、最初の確信を終わりまでしっかりと保つ者でありたいと願います。

９月１２日（土）ヘブル人への手紙３章１５～１７節

「では、聞いていながら反抗したのは、だれでしたか。」（１６節）

１５節で再び７，８節に引用された詩篇９５篇７節の引用に戻ります。そして引用されていた詩篇９５篇７節が繰り返しされていますが、このことは、いかにこのことが重要であるかを

私たちに強調的に語っています。そして１６節では「聞いていながら反抗したのは、だれでしたか。モーセに率いられてエジプトを出た、すべての者たちではありませんか。」と言います。これは民数記１４章に出てくる話しですが、イスラエルの民は、カナンの地に偵察に言った時にその国にいた巨人を恐れて、カレブとヨシュアの「もし主が私たちを喜んでおられるなら、私たちをあの地に導き入れ、それを私たちに下さる。あの地は乳と蜜が流れる地だ。ただ、主に背いてはならない。その地の人々を恐れてはならない。彼らは私たちの餌食となる。彼らの守りは、すでに彼らから取り去られている。主が私たちとともにおられるのだ。彼らを恐れてはならない。」（民数記１４章８，９節）とのことばを聞かず、逆に彼らを石で打ち殺そうと言い出したのです。どんなに強い敵を前にしても、主の守りと支えがみことばの通りにあり、約束の地カナンへ入れてくださるとは信じることができなかったのです。それにより、彼らは荒野を四十年間さまよい、この世代の人たちは約束の地に入ることができませんでした。著者は、16、17 節において、このイスラエルの民の姿をもとに語っています。さらに１７節では「神が四十年の間、憤っておられたのは、だれに対してですか。」と言い、四十年の間という長い期間に目を向けさせつつ、神に対する反逆の大きさが強調されています。それとともに、神への反抗は、神の憤りを引き起こし、それは「荒野に屍をさらす」というさばきになって現れたことを思い出させ、神への恐れをもう一度思い起こさせます。

ここでは何が問題となっているのでしょうか。それは、１６節「聞いていながら反抗した」ということです。無知ゆえに反抗したのではなく、聞かされ、教えられていたにもかかわらず、イスラエルの民は反抗したのです。私たちも聞いているはずであり、教えられているはずです、それにもかかわらず、なお神に反抗していることはないでしょうか、思い出されることがあれば、すぐに悔い改めましょう。

９月１３日（日）ヘブル人への手紙３章１８，１９節

「このように、彼らが安息に入れなかったのは、不信仰のためであったことが分かります。」（１９節）

１８節には別の問いが記されています。それは「神がご自分の安息に入らせないと誓われたのは、だれに対してですか。」です。それに対しては「ほかでもない、従わなかった者たちに対してではありませんか。」と言います。ここでは不服従の問題を指摘していますが、これは自分たちに対する神のみこころ、ご計画、律法を知らされながら、故意に背いて行動するということです。このことが、神がご自分の安息に入らせないと誓われたという悲劇的な結果を生むこ

ととなりました。なぜこのことが悲劇的なのかお分かりになるでしょうか。まさに神の安息とは、これ以上ないほどの幸いであり、大いなる祝福です。そして、信じる者は必ずこの安息に入ることができ、実際に神が与えようとしている安息は必ず実現します。その神の安息に入ることができないということは何ものを以てしても埋め合わせをすることができないほどの損失なのです。そして１９節で「このように、彼らが安息に入れなかったのは、不信仰のためであったことが分かります」と、結論づけています。そして、１９節での不信仰は、１２節の「不信仰な悪い心」と呼応しています。そして、不信仰な悪い心、罪に惑わされて頑なになることの何が問題なのかをイスラエルの歴史からヘブル人への手紙の著者は、例証しています。そして、このことは私たちに対しての警告でもあります。不信仰は、神様からの恵みの賜物や私たちのために神が備えてくださっている祝福をも失うこととなります。これは、「あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは、忍耐です。」（１０章３６節）と正反対です。私たちも不信仰になることなく、信仰により恵みによって私たちに賜物として与えられようとしている約束のものを受け取りたいと願わされます。